



まいばらの農を支える元気なチカラ ～農を通じたまちづくり～ おらみい 近江飯ファーム

トマトの剪定に精を出す理事長の川崎源一さん かわさきげんいち

生産者の高齢化に伴う耕作放棄地の増加や後継者不足、鳥獣被害など、現代の農業は様々な課題を抱えています。

このような中、単なる「生産」としてではなく、まちづくりの観点を取り入れて「地域貢献」する農業に取り組んでいる「農事組合法人 近江飯ファーム」を紹介します。

ファームのあゆみ

飯地区では、平成7年に農作業の受託組織として「飯営農組合」を設立。そして、この当時55軒あった集落内の農業者が平成16年には38軒に激減し、そのうち継承者がいるのが10軒という状態に。

このままでは集落の農業が崩壊するという危機感の中で新たな組織が模索され、いまのファームの前身である「特定農業団体 飯営農組合」が組織されました。

この営農組合では環境こだわり農業や学校給食との連携などの取り組みが進められ、そして平成22年、さらにその活動を充実するために法人化し「農事組合法人 近江飯ファーム」が誕生しました。

ファームのコンセプト

農業を事業として捉えたとき、利益を追求していく方法もひとつですが、営農組合を立ち上げたときに組織が選択したのは「財産を守り継承する農業」。つまり、田んぼは個人の財産ではあるものの集落の財産としても位置づけ、「集落の田んぼは集落で守っていこう」という考えが、ファームがめざす農業の根幹になっています。

ファームの強み

現在ファームが担っているのは、集落内の農地面積29haのうち約86%にあたる25ha。このように農地が集積されたことで品種や作物によってブロックに分けて作付けすることができ、効率的に一元管理ができるようになってきているそうです。

さらには、麦や大豆、トマトやイチゴなど、様々な作物の「複合化」に取り組むことで、例えば作物に病害が発生したときのリスクが分散できるほか、通年で一定の作業量を確保し、安定した就労機会を提供できるようにしているとのこと。

一方、ファームでは、組合を立ち上げる際に、性別や農家・非農家に関わらず幅広く人材を募集されました。結果、組合員数43人のうち29人が男性、14人が女性で、適正や体力に応じて作業を振り分けているため、根気のいる地道な手仕事や農産物の加工に女性のパワーが大活躍しているそうです。

もちろん、作業技術の向上のための研修会などを実施し、今後の農を継承する「担い手」の人材育成にも余念がありません。

ファームが地域にもたらしたもの

農作物を販売する際、集落内での直売が大きな割合を占めているのがファームの特徴です。

例えば、昨年に集落内で米を注文したのは約80軒。これは飯集落の7割以上がファームから米を買っていることになり、田んぼを預けた人も、米の購入を通じて田んぼを守っていることになるのです。

しかも、その米は各家庭の戸口まで配達され、心の通った対面販売が行われているそうです。

雇用の面でも、高齢者や女性が働きやすい環境が整ったこともあり、



地元の大学に通う組合員の息子さんが、夏休みのアルバイトで大活躍。ファームの魅力に家族ぐるみではまっっていくケースも多いとか。農業を通じて、さまざまな人がつながっていきます。



「やけずこまずのいむらの里」と記されたいむら会館前の石碑。飯は昔から、天野川の恩恵を受けて干ばつでも田がやけず、土地が小高いので洪水でも水が込んでこなかったそうです。農業が盛んであったことが伺いしれます。

お問い合わせ

市 経済環境部 農林振興課(伊吹庁舎)
☎58-2228 ㊟58-1719

ファームの仕事を通じて地域の人がつながるようになったとのこと。

また、安心な村づくりに貢献しようと、ファームでは災害時の備えとして、集落の人全員が最低3日間食べることに困らないように備蓄米を保管しています。さらに、育苗用のハウスを災害時の一時避難所に活用することも検討されていて、10月下旬には自治会とタイアップして、ハウスでの宿泊訓練を実施するそうです。

こういったファームの取り組みが、農を通じた地域のつながりとなり、まさに集落の財産である田ん

ぼを守ることが、地域を守ることにつながっているように感じます。

近江飯ファームとして法人化して1年。法人化したことで、労災補償や運転資金の面が強化され、組織としてのしくみづくりも充実したそうです。理事長の川崎源一さんは、次のように語ってくださいました。

「ファームとしては、野菜などのハウス栽培をさらに軌道に乗せ、加工品の充実とあわせて活動に幅を増していきたいですね。

また、今後も自治会・ファーム・区民の三者にとってよい方法が選択

できるよう、『三方よし』の考えを大切にしていきたいと考えていますし、他の地域との情報交換や連携も積極的に行って、米原市全体の農業を元気にすることができればと思っています」

私たち消費者にとって、収穫の秋は格別に「食」への感謝を感じる季節です。近江飯ファームなど、生産者のみなさんの熱意ある取り組みに敬意を払い、農への関心を高めていきたいですね。